
黄泉からの帰還者

サイキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄泉からの帰還者

【Nコード】

N9793P

【作者名】

サイキ

【あらすじ】

何故俺は生きている？

かつての大戦で戦死した英雄リガルトは、見知らぬ森で目を覚ました。誰が何のために蘇らせたのか、リガルトはこれからどうするか。これより英雄の第二の人生が始まる。

プロローグ（前書き）

初投稿です

よろしくお願いします

プロローグ

そこは戦場だった。

広大な荒野に充満する血臭に、その元と成った累々たる屍の群れ。夥しい量の血と臓物が撒き散り、それはエディレスのいる丘の上の草花にまで及んでいた。血の海に沈むのは兵に騎馬、それと異形の化物。いずれも肉体の何所かを欠損し、荒野に果てていた。

およそ生存している者はいない。ただ静寂だけがこの荒野を支配している。

凄惨な光景だった。かつてここが咽かな草原だったと一体誰が信じるだろう。唯一変わらぬものといえば、真上に広がる天空ぐらいしかない。

エディレスは空に向けた視線を再び戦場に目を戻す。しばし彷徨うに任せていた視線だったが、それはある一点で止まった。折り重なった屍に覆われた荒野に、異様な物体を見つけたのだ。

屍の山に鎮座する巨大な異形。人間に似た体形こそしているが、屈んだ姿でも成人の背丈を越す巨体で、鎧に似た浅黒い外骨格に覆われている。背からは牡鹿の角の様な枝分かれした突起が無数に生え、異様に肥大した腕から伸びる指先は鍵爪状に変形している。その死神の鎌を想わせる鋭く反れた鍵爪はいったいどれ程の命を奪ったのか、肘から先を赤一色に染め上げ、周囲に黒い靄の様な瘴気を吐き出している。

化物。まさにそう呼ぶに相応しい異形だった。これほどに禍々しい存在をエディレスは知らない。もしこれと生きて対面していたらと考えると生きた心地がしなかった。

そう、生きていたら。

巨人は全身に裂傷を負い片腕を無くし、その上頭部がない。正確には首から上を鮮やかな切断面を覗かせ絶命していた。

これ程の化物まで召喚されたのか。ある種感嘆の思いを抱きなが

ら、エディレスは巨人の死体を眺め、ある事に気付く。

巨人の足元。屍に囲まれる様にして蹲る人影があった。血に染まり、生きているか死んでいるかも判別がつかないが、他の死体のような目立った損傷はない。

エディレスはその人影へと歩き出した。腰まで届く黒髪を歩に合わせ揺らし、艶やかな美貌は狂気じみたこの場でも歪む事もなく、黒瞳を人影へと向けていた。彼女にはそれが誰だか心当たりがあった。もし自身の思う通りの相手だったら、あの巨人を殺したのは恐らくあの男だろう。

ふもとまで降りると、血臭はより濃密になる。踏み出すと靴底で血が跳ね、再度踏み出せば潰れた肉の感触が伝わる。不快に感じなくもなかったが、気にした素ぶりもなくエディレスの足を踏み込ませていた。近づくにつれ、予想は確信へと変わっていた。

幾筋もの亀裂の生じた長剣を大地に突き立てて抱えた大柄な男。黒髪は血と体液に濡れぼりになり、額からは血が流れ伝っている。身に纏っている衣服はボロボロで、全身至る所に傷を負い血塗れだった。

間違いない。

「リガルト」

エディレスは男の名を呼んだ。その声に男は僅かに顔を挙げた。人相が変わるほど憔悴してしまっているが、右の頬に彫られた紋様はエディレスの知るリガルトのものと相違なかった。

「……よう」

喉に血が詰まっているのか歪な呼吸音を発している。口元は真っ赤に染まり吐血したものだと思われる。そこでエディレスはリガルトの背後の異変に気付いた。肘から切断された巨大な腕がリガルトの

背に突き刺さり、腹部から見覚えのある鍵爪状の指が露出している。
あの巨人の腕だった。

「――その傷、もう助からないわね」

冷たく、無感情に言い切る。

明らかに致命傷だ。出血こそ少ないものの、それは腕が栓がわりになっているためだ。重要な臓器だって破壊されているだろう。まだ生きていることが奇跡といえた。現に身近に迫った死に肌は土気色へと変わり、全身は痙攣に襲われていた。

もう長くない。

魔法による延命も無理だ。

想像だにしなかった。エディレスの知る限り、この男はどんな窮地でも生き残る傭兵だった。不敵な笑みを浮かべ、どんな相手に対しても退くことなく立ち向かう、彼女の嫌う類の直情傾向の愚か者。それが今ではこうも弱々しく死にかけている。

「そっちの首尾はどうなった？」

「成功よ。私達は帝国に勝利した」

「勝ったのか」

「ええ。それでこちらの助勢にと派遣されたけど、来て見れば無様な死にかけが居たというわけ。とんだ無駄足ね」

「……言ってくれるな、魔女め」

口の中の血を吐き捨てリガルトが睨む。

本来ならあの化け物と相對して、どんな状態であれ生き残ってい

るだけでも僥倖だった。だがなぜか、口から発せられる言葉は真逆のものだった。

「だってそうでしょう。今の貴方を形容する言葉なんてそれぐらいしかないわ。目的を目前に唯朽ちゆくなんて。――所詮、貴方もその程度だったのね」

「お前……！」

侮蔑の言葉にリガルトから怒気が立ち昇る。以前と違う精悍さに欠けた目つきで、以前と違うか細く震える声で、何と弱々しい姿なのだろう。その姿に言いようのない失望がエディレスを襲う。だからだろう、こんな言葉を口走ってしまったのは。

「契約を果たしましたようか？」

その言葉に、リガルトの瞳が見開かれた。

彼は思いもなかったのだろう。エディレスの言葉を。

「契約報酬は、――――だったわね？」

条件が多少変わってしまったようだけど、どうせ魔法での延命も無理だし、細かい事は良しとしましょう。最後くらい安らかに逝きたいでしょう？」

「……驚いた。こういう風の吹きまわしだ」

「純然たる善意よ。貴方は今まで尽くしてくれたからね」

自身の言葉にエディレスは心中で嘲笑する。善意などあまりにも的外れな言葉で滑稽でしかなかった。

ただ、驚いたというのは彼女も同じだった。

エディレスは瞑目する。私は思っていたより、この愚直な男を気に入っていたのだらう。

だが、それ故に失望もした。

直情的な愚か者、されど愚直にも前に突き進むこの男だからこそ、ある種の羨望を彼女は感じていた。

しかし、もう違う。

志半ばで死ぬような男なら、もう興味もない。

せめて、後腐れなく死んでもらおう。

二度と思いださないように。

「さあ、言いなさい」

瞼を開けリガルトを見据える。リガルトもまたエディレスを見据え口を開く。それはなぜか以前と変わらない不敵な笑みだった。

「貸しにする」

「—————」。

きょとんとした顔で、エディレスは無意識に自身の羽織った紫紺のローブを握りしめた。

「……貸し？ 貴方は何を言ってるの？」

思わず聞き返す。

この男の願いをエディレスは知っている。それは、少なくとも貸しなどという様なものではなかったはずだ。

知らず眉根が寄る。エディレスは不快気に睨みつけていた。

そんな彼女をリガルトは俯いて笑っている。今まで見たこともな

いほど痛快に、満足げで。

何故この男はこんな笑い方をするのだろう。
癪に障る。

「私は貴方の願いを聞いているのよ？」

「そうだ。だから、貸しにする」

「……これから死ぬ人間が借りなんて作ってどうするつもり？」

「さあな。けど貸しにした以上、返すまで契約は続けてもらう」

なんだ、それは。

馬鹿な事を、そう口にしようとするがリガルトの目を見ると声が出なかった。まるでエディレスの内面を全て見透かしているようなそんな目。

気に入らない。

不快を通り越してエディレスの瞳には殺気が揺らめいていた。この男がいったい何を考えているのか、彼女には理解できなかった。仮面のような表情にひびが入っていく。今まで誰にも吐露しなかった感情の渦がエディレスを取り巻く。

思わず罵倒の言葉を吐こうと、口を開きかけた時、笑い声はゼンマイの切れたオルゴールの様に途切れていた。見ればリガルトの痙攣は止み、笑みを浮かべた間々息を引き取っていた。

エディレスの表情が歪む。戦場を、大量の死体を見たときでさえ平然としていた表情が陰悪なほどに変わっていた。開きかけた口からは獣のような唸り声が漏れる。

あんな馬鹿なことを言い残してこの男は逝ったのか。

馬鹿げた願い。そう、余りにも馬鹿げた願いだ。このような願いなら、叶える必要もない。所詮、死に際の戯言。破棄した所で問題

もないし、誰も咎めもしないだろう。

射殺さんばかりにリガルトの遺体を睨みつけた後、エディレスは表情を取り繕うことなく、背を向けて歩き出す。まるでリガルトという存在など最初からいなかったと思うかのように。自身の中から拭い去るように。

それでも、男の面影が脳裏を離れる事がなかった。打ち消そうとしても、最後の言葉が耳朶に蘇る。

まるで呪言だ。エディレス・エヴァン・シュベルリングを脅かす呪い。

どのような魔導書を読んだところで解呪できない呪い。解く方法は唯の一つ。

———貸しにした以上、返すまで契約は続けてもらう。

足を止める。

振り返り、リガルトを視界に納めた。

彼女の口元に不敵な笑みを浮かべ宣言する。

「——そう、わかった。ならこの借り必ず返すわ。私がエディレス・エヴァン・シュベルリングであるために」

魔女の森

樹海に剣戟の音が鳴り響く。幾数もの金属音が打ち合う中、木々の間から悲鳴が漏れた。

剣の柄から伝わる肉の感触に、クリスは僅かに眉を顰める。

白を基調とした軽鎧に胸部に施された梟の徽章。それを身に付けているのはまだあどけなさの残る少女だった。クリスは肩口で切り揃えた金髪の間髪から碧眼の相貌を相手へと注いでいた。

相手の肩口から入った刃は脇腹から抜け、追隨して血しぶきが飛ぶ。倒れこむ相手の脇へ一歩踏み出し、背後にいたもう一人に襲いかかる。相手は体格こそ違えど、先ほどの相手と同じ黒装束を纏った者だった。顔を覆面で隠していて判別できないが、唯一露出した目元は感情の失せた人形の様な瞳が覗いている。クリスにはその瞳に見覚えがあった。といってもこの黒装束個人の事ではない。その瞳、人を殺すことに何の躊躇いも感じない暗殺者の瞳に、だ。

黒装束は迫りくるクリスを待っていたとばかりに、手に持った短剣を横薙ぎにした。短剣は緑色にくすんだ光を放ち、毒が塗られていることが分かる。クリスは勢いを殺さぬまま姿勢を下げ、頭上を刃が空ぶるのを確認してから、隙が生まれた相手の脇腹に斬り込んだ。

浅い。

黒装束の脇腹に食い込んだ刃は、傷口から血を滴らせてはいたが急所には届いていない。クリスは距離を取ろうと後ろに跳ぼうとするが、黒装束が逸早く彼女の握る剣の鰐元を片手で掴み、もう一方の手に握った短剣を逆手に持ち振り下ろそうとする。

「くうっ！」

剣を手放し避けようとするが間に合わない。せめて致命傷を防ごうと、箆手を眼前に構えるが、短剣はクリスに当たる寸前で弾かれた。次いで黒装束自身も風の塊の様なものに吹っ飛ばされる。相手はそのまま大木にぶつかり、頭部から血を流して沈黙した。

クリスは肩で息をしながら、倒れた黒装束を見遣る。今のは魔法だった。一体どこから。

「――クリス様無事ですかつ！？」

「セクター！」

クリスの背後、茂みの奥に男はいた。細部は違うがクリスと同じ梟の徽章の施された鎧を身に纏った、白髪を短く刈り込んだ青年は、片手を前面に構え油断なく周囲を探っていた。その手元には淡く輝く魔法陣が展開されている。

セクターは魔導士だった。クリスの所属する騎士団で一番の魔法の使い手であり、騎士団の上位に当たる実力者だった。

「他の皆は？」

安堵の声を上げ、素早くクリスは男――セクターに近付いた。セクターは生来の細目に余裕のない表情を浮かべて彼女を迎えた。

「エルンストが殺られました。アレンとポードは分かりません。トールは私の後ろに」

セクターの背後に、憔悴し怯えきったトールの姿があった。トールは必死に周囲に視線を撒きながら、クリスに訴えた。

「……これ以上はやばい、早く逃げないと……」

「無理だ、囲まれてる」

周囲の木々、茂み、日陰。あらゆる場所から気配を感じる。剣を構え直して、クリスは歯噛みした。

状況は最悪だった。

突然の奇襲に対処しきれず、戦力を分断されたあげく、退路も断たれる。いくら慣れない森林地帯とはいえ、一方的に掻き乱されていた。

「糞っ！あいつ等何者だ！？」

「わからない。ただ此処にいるんだ。目的は私たちと同じだろう」

そう此処に、【魔女の森】にいるのだから。

ウィツシュガルド王国南部に位置するシュベルリング領には、百年以上前から立ち入りできない森があった。森一帯を不可視の壁が覆い、入ることはおろか近付くことさえできないのだ。それに興味を持ったとある高名な魔導士が調べたところ、かろうじて不可視の壁が魔法によるものだという事は分かったが、他の一切が分からず仕舞いだった。

一体誰が何のためにしたのか。様々な噂が飛び交う中、一人の魔導士の名が挙がった。

エディレス・エヴァン・シュベルリング。

嘗てその名を全土に轟かせた最高位の魔導士にして、【魔女】の称号を持つ初代シュベルリング領の領主。

事実の程は、彼女が後任者に全権を委譲した後姿を消してしまっただけだが、その噂が独り歩きしつつには【魔女

の森」と名付けられていた。

噂では、【魔女の森】にはエディレス・エヴァン・シュベルリングの隠した何かがあるというが、根も葉もない噂ながら強力な結界の存在が事の信憑性を高める事になった。

各国の魔導士が興味を持って集い、魔法構成を解読しようと研究が進んで、現在では魔法研究の盛んな観光名所としても知られていた。

そのような森に何故クリス達が居るかというところ、四日前【魔女の森】の結界が突如解かれたのだ。何があったのか皆こぞって中に入ろうとしたが、すぐにシュベルリングの私設騎士団が出勤し、森への出入りを制限し調査隊を派遣した。

クリス達は調査隊の先遣隊メンバーだった。

「畜生……だから俺はこんな場所に来たくはなかったんだ!!」

「今はそんなこと言っている場合じゃない」

泣き言を喚くツールを、セクターがたしなめる。クリスも言い返そうとしていたが噤んでいた。

そうだ。今は言い争いをしている場合じゃない。一刻も早くこの状況を打開しないと。

苦慮するクリスに、見兼ねてセクターが小さく呟いた。

「どうします？確かに囲まれていますけど、今なら逃げられるかもしれません。奴らの目的が本当にこちらと同じならば、逃げる我々を追ってきてまで殺そうとは思わないでしょう」

「確証がない」

「だが、それしかありません。それに奴等は顔を隠している。顔を

見られていないのなら、我々を見逃したところで痛手ではない。むしろ我々を殺すために犠牲になる人員を考えれば、逃がした方が面倒が少ない。何より、いつまでも私達にかまっていれば、我々の本隊が来ることも分かっているはずだ」

クリスはセクターの案を反芻する。

確かにその通りかもしれない。実力で言うなら、クリス達は黒装束に劣らない。もし黒装束がクリス達を殺そうとすれば無傷では済まないはずだ。

それでも、

「……いやだ。アレンとポードはどうする、死んだかも分からないのに置いて行くのかっ!？」

クリスにとって譲れない一点がそこにあった。

「クリス様。今は自分達を優先するべきです。それに私は貴女のことをエルガ様に頼まれている。死なせる訳にはいかないんです」

「けど!それでも……!」

「はっ、だったらテメエだけ残ってろってんだ!セクター、俺達だけでも——」

二人の言い合いに割って入ったトールの声が突然止まった。見れば彼の額に短剣の先端が埋まっている。クリスとセクターは即座に横に跳びのいた。瞬間、彼女達のいた場所に銀の煌めきが通り過ぎていく。

姿勢を下げクリスはトールを確認した。完全な即死だった。彼女の身体から怒りと殺意が彷彿される。

「お前らあっ！」

「クリス様！」

セクターの声を背中に、短剣の飛んできた方向へクリスは疾走した。彼女の姿を確認してか、木々に隠れていた黒装束が一人姿を現した。相手は構えるわけでもなくクリスを待っていた。

「馬鹿にしているのか!？」

激昂してクリスは剣を振りかぶる。そのまま肉薄し振り下ろそうとするが、クリスの刃は黒装束に届かなかった。彼女の頭上、左右から飛来する短剣がクリスの疾走を阻んでいた。

罠か。

胸中で呻き、クリスは短剣を叩き落とそうとするが、振りかぶった動作は次の動作を遅らせた。

どうする。一つは落とせても、もう一つは無理だ。

避けようにも一度止まった足は動いてくれない。苦慮するクリスに、背後から救いの手が差し伸べられた。追いかけてきたセクターが先程と同じ風の塊を飛ばし、右から襲いかかる短剣を弾き飛ばしたのだ。

クリスはもう一对の短剣を叩き落として、再び黒装束に迫ろうとする。だがそれすら相手の術中だった。正面にいた黒装束は、いつの間にか目前にまで迫り、短剣を一直線にクリスに突き刺そうとしていた。

完璧なタイミングだった。こう近づかれてはセクターも魔法を使えない。

「避ける！」

セクターの叫び声が聞こえるが、もう間に合わなかった。

万事休すか。

クリスは自身の不甲斐なさに歯を噛みしめた。騎士として生きる
と決めた時から死の覚悟はしてきた。訓練に励み、自身を鍛錬し、
努力してきたのだ。それも故郷を守り悲しみを減らしたいという理
想を果たすため。なのに自分は理想を果たす事も出来ず死のうとし
ている。これでは唯の間抜けじゃないか。私はこんな想いを抱いて
死ななければならぬのか。

クリスは死を拒否するかのように瞼をきつく閉じ最後の瞬間を待
つ。だがその時は来なかった。それとも死とは何も感じないものな
のか。

恐る恐るクリスは瞼を開け、瞳に射した光景に啞然とした。

「————え？」

黒装束が吹き飛んでいた。そのまま勢いよく地面に叩きつけられ
首をあらぬ方向に曲げ痙攣している。

そして黒装束がいた位置にまるで槍の穂先の様に、引き締まった
足が突き出されていた。

足を突き出した男はボロボロで原形を留めていない衣類を纏って
いて、半裸に近いその姿に物乞いかとクリスは思ったが、破れた合
間から覗く体は均整のとれた筋肉質で、何より男の瞳は彼女の知る
物乞いの類とは明らかに違っていた。ギラギラと光るそれは彼女が
見慣れた戦士の類だった。

「状況は分からないが、悪そうなのはお前らだな」

右頬に彫られた紋様を歪めて、男が不敵な笑みを浮かべた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9793p/>

黄泉からの帰還者

2011年1月9日03時47分発行